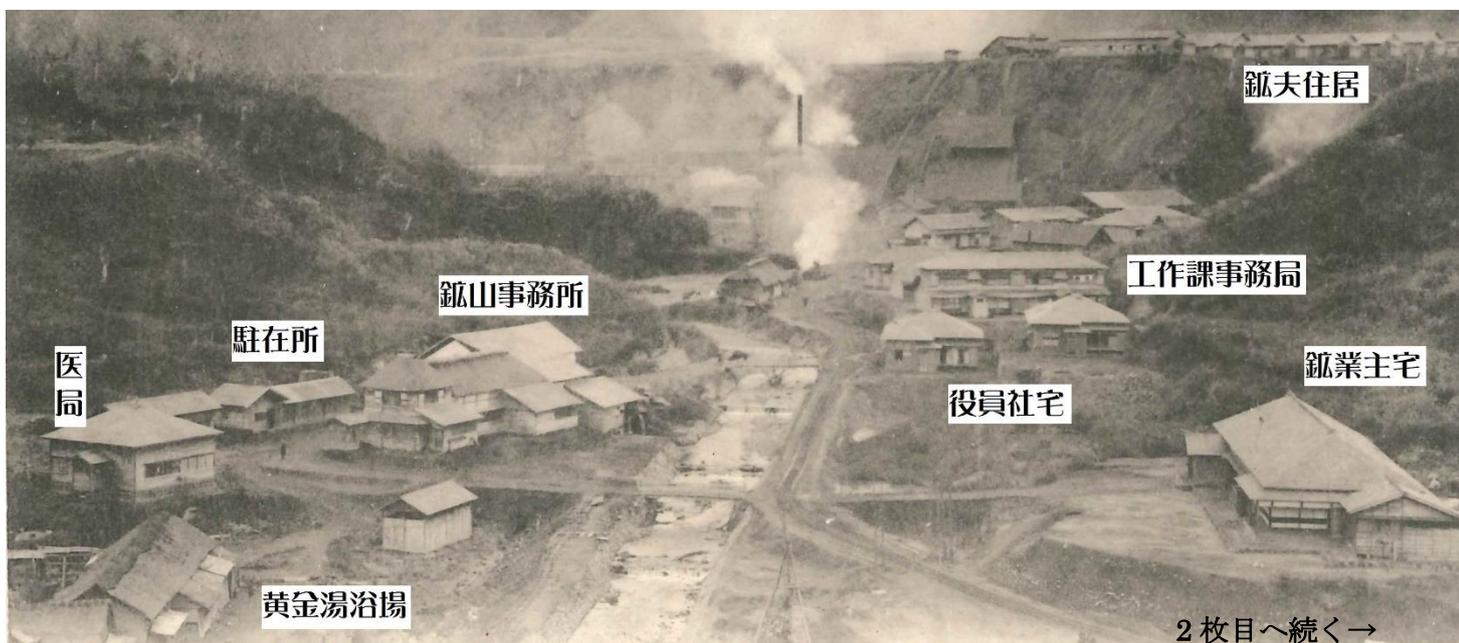


# 村歴通信 第十四號

## 「大蔵鉦山」のこと

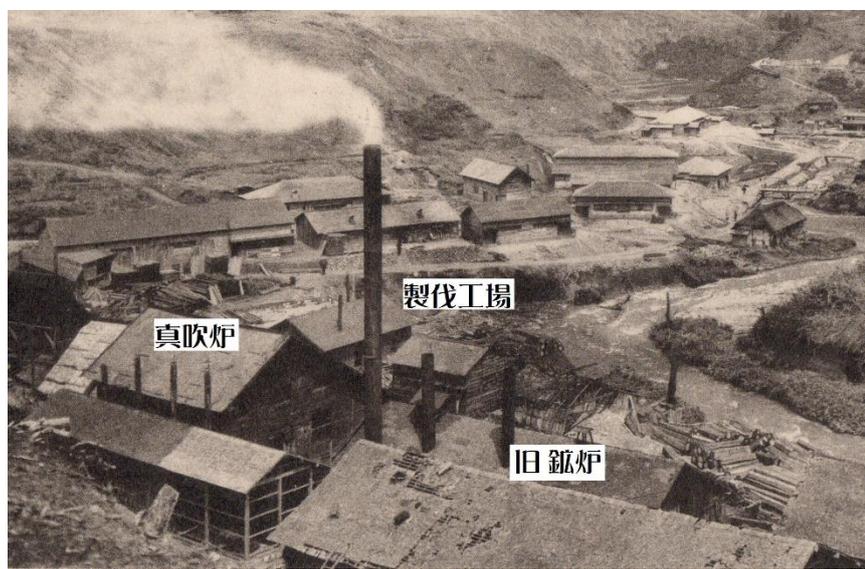
～器械の運轉する音、鋸の木材を挽き割る音、  
鍛冶屋が丁々と槌を下す音、  
相合して喧しく、殆ど人語を解せざる程なり～

明治40年、石川県金沢の横山章氏の横山鉦業部が、  
楯岡の細梅三郎氏より大蔵鉦山の全権を譲り受け、金鉦で  
はなく銅鉦製錬用の作業機械へ一新。  
国内銅産業の隆盛と共に事業も拡大していき、大正3年、  
在山人口約2500人(内労働者800人)の最盛期を迎え、  
一時は永松銅山の産出量をも凌駕し、県下1位となります。  
娯楽にはビリヤード場やテニスコートなどがありました。

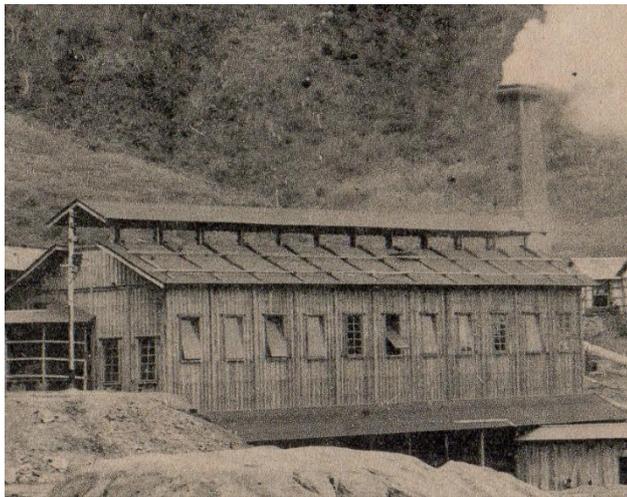


動力はガスや石炭を使用していたが、

大正5年、柳瀨に発電所を起工して主動力に変わりました。



大正6年、銅産出量の増加により、従来の鋳炉では容量が足らなくなり、鍵金野の選鋳場の向かいに製錬場を新設し、2倍の容量の角炉を設置。(この角炉は現在もあります)  
子供も多くなり、肘折小学校の生徒数も激増しました。



製錬場

子供の頃の思い出は、まず鋳山に光り輝いた電灯の美しさが浮かんできます。年一度のお祭りでは様々な電気仕掛けのからくりが動き、私たちの度肝を抜いたものです。小学校でも、特に鋳山の役人の子供は勢力が強く低学年の子供がうっかりぶつかろうものなら、すぐ泣かされたりし、またその頃は大部分の子供が和服でしたが、その子供たちだけは金ぴかのボタンの洋服で、登下校には二人くらいのお付き人が車送迎で威張っていました。  
柿崎 同

しかし大正7年の第一次大戦終結。

そして日本中に巻き起こった戦後不況で、銅の価値が大暴落。大蔵鋳山もたちまち経営不振となり、

大正9年、ついに大蔵鋳山は一時閉山となり、鋳山労働者達も家族を連れて引越していきました。

ここから32年間大蔵鋳山は眠り続けます。

肘折歴史研究会